

●ウイスキー・ラベル物語-12

植民地で再生されたアメリカン・ウイスキー(2)

—アメリカ革命がもたらしたバーボン・ウイスキーの誕生—



か 河 合 忠
Tadashi KAWAI



コロンブスによる新大陸発見

ウイスキーの古里イギリスからの移民大移動を促したコロンブスによる新大陸発見こそアメリカン・ウイスキーの原点とってよいだろう。イタリアの航海家、クリストファー・コロンブス(Christopher Columbus, 1451~1506)は、ポルトガルの西に約4,000 km進むとインドがあり、その先に中国があると信じ、1492年8月3日、三隻の小船(サンタ・マリア号、ピンタ号、ニーニャ号)で出帆し、第1回目の新大陸発見の途についた。そして、同年10月12日、インドの近くと彼が信じた現在のバハマのサン・サルバドル島(コロンブスが命名)に上陸した。これが、現在、米国の祝日となっているコロンブスの日(10月の第2月曜日)の由来である。

さらに、1493~96年、1498年、1502~04年と合計4回、新世界への冒険を果たし、カリブ海の多くの島々、さらにベネズエラの海岸にまで足を延ばしていた。しかし、彼は東インドに到着したと考えて、当時100万人を数えた先住民をインディアン(Indians, American Indians, Red Indians)と名づけた。それゆえ今でもサン・サルバドル島一帯は西インド諸島といわれているのである。

アメリカという名の由来は、1497年に南アメリカ大陸の北東海岸に上陸したイタリアのフィレンツェからの航海家、アメリゴ・ヴェスプッチ(Amerigo Vesupucci)だといわれている。もちろん彼が初めてアメリカ大陸へ上陸したわけではないが、誤って彼の名が採用されたというわけである。

16世紀になって、いよいよヨーロッパから新大

陸への船出の旅が本格化するが、1513年スペインのポンス・デ・リオン(Ponce de Leon)がフロリダを発見した。それ以後、フロリダは、1763年にイングラントに譲渡されるまでスペインの支配下となり、1783年にスペインに返還され、1819年に合衆国に買収され、1845年にフロリダ州となった。現在でも、フロリダ州北部の東海岸にある合衆国で最も古い町セント・オーガスチン(St. Augustine)にはポンス・デ・リオンが上陸したとする海岸に小さな上陸記念碑が建っている(写真1, 図1)。そこに上陸したスペイン人は、花に埋もれた美しい地に感動し、思わず「La Florida: ラ・フロリダ(花の咲く陸地)」と叫び、それがフロリダの名前の由来となった。筆者は、1958年9月、米国での病院研修の地をホノルルからマイアミに移動して4年半を過ごしたが、フロリダ州の愛称はThe Sunshine State



写真1 ポンス・デ・リオンが発見し、上陸したアメリカ新大陸の地に建つ上陸記念碑

現在のフロリダ州東海岸北部にあるアメリカ最古の町、セント・オーガスチンの郊外にあり、1959年に訪れた当時のもので、現在はどのように保存されているか不明である。



図1 現在のアメリカ合衆国ケンタッキー州の周辺地図
 ケンタッキー州は、東はウェスト・バージニア州とバージニア州と接し、北はオハイオ州、インディアナ州とイリノイ州と接し、西はミズーリ州と接し、そして南はテネシー州と、7つの州に囲まれている。開拓時代に主にウイスキーの搬出に利用されたのはオハイオ川である。オハイオ川は全長1,580kmで、2つの川がペンシルベニア州のピッツバーグで合流し、オハイオ州を南西に抜けてシンシナティを経て、ケンタッキー州の北の境とテネシー州の西の境を流れる。ミシシッピ川に合流した後は、さらにミシシッピ州の西の境を流れてメキシコ湾に達する流通の大動脈として大いに活躍した（次回参照）。

といわれるように、燦々と照る太陽の光と美しい自然に触れた時の素晴らしい感動を今でも忘れることができない。



新大陸、東海岸へのヨーロッパ移民の大移動

1607年、イギリスから3隻の船が到着し、初めて植民地を建設し、当時のイギリス国王ジェームズ1世に因んで命名されたのが、バージニア州ジェームズタウン (Jamestown, Virginia) であった。米国東海岸の観光地として有名な街、ウィリアムズバーグ (Williamsburg) は、現在、街全体が17～18世紀の植民地時代の姿を再現しているが、それから南西に約15 kmの所にジェームズタウンがある。ウィリアムズバーグを一日中散策して植民地時代の雰囲気満喫したが、ついでジェームズタウンまでは

足が延びなかったのが残念であった。

1611年には、今は9・11テロで一層有名になったマンハッタン島にオランダ人が定着し、1626年にニュー・アムステルダムと名づけたが、この時代にオランダ人の手によってウイスキーが造られていたらしいとの記録がある。しかし、後にイギリス人に占拠されて、その名称も現在のニュー・ヨークに改められた。

1620年11月、ピルグリム・ファーザーズ (The Pilgrim Fathers) を乗せたメイフラワー号 (The Mayflower) が東海岸に到着してプリマス (Plymouth) に植民地をつくり、以後イギリスからの巡礼の旅が続いてマサチューセッツ (Massachusetts)、コネティカット (Connecticut) へと植民地が広がっていった。その後も1634年にはカトリック教徒がメリーランド (Maryland) へ、そして1682年にはクエーカー教徒がペンシルベニア (Pennsylvania) へと大移動した。もちろん、こうした新大陸への移動はイギリス人だけではなく、フランス人も続きケベックに到着し、北米大陸南部から南米大陸へはスペイン人、ポルトガル人が大挙して植民地をつくっていった。やがて移住民同士の争いも数多く発生する事態が頻発し、1756～63年には、“The Seven Years’ War” (7年間戦争) があった。すなわち、イギリス植民地であるルイジアナ (Louisiana) にフランスからの移住民が侵食するという土地争いがあり、最終的にはイギリスが勝利を収めて収束した。

当時、ペンシルベニアの植民地に移住したイギリス人は母国からウイスキーを持ち込んだであろうし、自分たちでも果物を原料とするブランディーや、糖蜜を使ったラム酒を蒸留したりしていた。建国初期にウイスキー造りを盛んに行ったのはペンシルベニアに移住したアイルランド人たちで、母国から持ち込んだ技術によって、ライ麦などを使ったウイスキーの生産が小規模ながら相当広まっていたようである。当時のペンシルベニアには5,000人を超える蒸留業者がいたと推定されているし、アメリカ合衆国の初代大統領に就任したジョージ・ワシントン自身がウイスキー造りをしていたこともよく知られている。植民地時代では、飲酒が日常生活の中の大きな楽しみの一つであり、多くの市民が自分たちで楽しむためにウイスキー造りに励み、さらに余分な分を居酒屋で販売していたことは当然の成り行

きであろう。しかも、穀物は過剰気味であり、非効率的な穀物の流通よりも、単価が高く運搬が容易な蒸留酒の生産を考えたのは当然であった。

しかし、イギリス本国政府がこれを見逃すはずもなく、蒸留酒などさまざまな商品に対して過酷な税金を課していた。そのため、スコットランドで起きたと同じように、密造業者が横行し、月夜に蒸留釜を運び移動しながら密造酒造りをしたために、密造業者を「ムーンシャイナー (moon shiner)」と呼ぶようになったし、未開拓なケンタッキー地区へ移動する動きが出ていた。このころ、すでに、1785年に、後のバーボン・ウイスキー造りの先覚者となったジム・ビーム (Jim Beam) が、独立戦争の勝利を感じ取り、豊富な穀物生産地と豊かなライムストーン (lime stone: 石炭岩) による大量の水を有するケンタッキー州へ移動している。



アメリカ革命の始まり

多くのイギリス人が東海岸を中心に多くの植民地に入植し、先住インディアンとの度重なる争いを経験しながら新天地を開拓したが、母国のイギリス政府からの強い圧制と高い関税に苦しんだ。植民地弾圧のために貿易を妨害し、軍隊まで派遣したことから、日増しに市民の不満は高まっていった。その不満の捌け口の切っ掛けとなったのが、1770年のボストン虐殺事件、そして1773年に起きたボストン茶会事件 (The Boston Tea Party) である。

ボストンには、ジョン・ウインスロップ (John Winthrop, 1588 ~ 1649) 率いる約1,000人のキリスト教の新教徒 (プロテスタント: Protestant) が1630年に移住した。当時、イギリス国教に属さない彼らは異端の罪で追放され、新天地を求め、“神の国”を建設すべくマサチューセッツ湾植民地を建設した。すなわち、ワस्प (WASP: White Anglo-



図2 ボストン茶会事件の起きた帆船模型図

Saxon Protestant) の人々のメッカとして栄えたのである。後に彼はマサチューセッツ州知事を終生務めることとなった。こうした歴史的背景が、ボストン市民の反本国政府感情の高まりとなり、一触即発の状態であった。

東インド会社の紅茶貿易の不振に苦しんでいたイギリス政府は、植民地内で独自に紅茶の貿易をしていたジョン・ハンコック (John Hancock, 1737 ~ 93) らの輸出を禁止し、紅茶の貿易権を東インド会社に独占させたことから、ボストン茶会事件は1637年12月16日の夜、ボストン港に停泊していた3隻のイギリス船をインディアンに扮したハンコックの一隊が襲い、342個の紅茶の積荷を海に投棄したのである。その当時のイギリス帆船を再現したものが博物館 (Boston Tea Party Ship and Museum) に展示されているので、ボストンを訪れたら一見の価値がある (図2)。

こうした事件を背景に、1774 ~ 75年、13の植民地がフィラデルフィアのカーペンターズ・ホール (Carpenter's Hall, 現在も開館している) に集まって最初の The Continental Congress (大陸会議) が開かれて、1775年、マサチューセッツのレキシントンとコンコルド (Lexington and Concord) においてイギリス政府との独立戦争に突入した。ジョージ・ワシントン (George Washington) は1776年7月4日に独立を宣言 (Declaration of Independence)、ジョージ3世のイギリス軍隊を破った。8年後の1782年ようやく平和のための話し合いが始まり、



写真2 インディペンデンス・ホール
アメリカ合衆国独立の舞台となり、現在もフィラデルフィア市内に保存されている。

1783年9月3日のパリ講和会議において、英国はアメリカ合衆国の独立を認めたのである。その舞台となったインディペンデンス・ホール (Independence Hall) (写真2)、自由の鐘 (Liberty Bell) など独立戦争にまつわるさまざまな歴史的建造物が今も残されている。



ウイスキー暴動でケンタッキーに移動

イギリスからの独立を果たし、1787年に合衆国憲法が草案され、1789年に発効し、初代大統領としてジョージ・ワシントンが就任して、本格的な国づくりが始まった。しかし、独立戦争中の膨大な戦費による経済的危機を乗り越えるために、当時の財務長官アレクサンダ・ハミルトン (Alexander Hamilton, 1757～1804) は蒸留酒への課税を導入したのも至極当然といえるであろう。しかし、ウイスキー造りの盛んな西ペンシルベニアの住民はもとより、一般民衆も酒税の導入に猛反発をした。特に、ペンシルベニアで蒸留酒造りをしていたスコットランド・アイルランドからの農民たちは酒税の支払いを拒否し、1791年遂にウイスキー暴動 (Whiskey Rebellion) へと発展した。その暴動は政府が考えていたよりも大規模なものとなり、それを収束するために合衆国政府は1791～94年にわたって、実に1万5,000人の軍隊を派遣することとなった。この数は独立戦争のために動員した以上のものとなった。このような状況を打開するために、スコットランドやアイルランドからの頑固な移民を納得させるために、当時バージニアの一部であったケンタッキー地区への移住政策を打ち出した。かくして、ケンタッキーが後にアメリカン・ウイスキーのメッカになったのである。

当時のバージニア州知事で、後に第三代大統領に就任したトーマス・ジェファソン (Thomas Jefferson, 1743～1826) は、政府の威信にかけてウイスキー暴動を収束するため、永住してコーンを生産するという条件で、彼らの先駆者たちに60エーカーのケンタッキー (Kentucky) の土地を提供したのである。そこにはブルーグラス (blue grass) と

いわれる広大な土地とライムストーンで濾過される豊かな水があった。今でもケンタッキー州の愛称として The Blue Grass が使われている。そこから生産される大量のコーンは、開拓民や家畜が消費する以上となり、余剰のコーンを外に運び出すことも容易ではなく、彼らは商品価値が高く運搬も容易なウイスキー造りに利用することを考え出したのである。コーンを主原料としたアメリカンの本格的誕生である。



ケンタッキー州独立までの歩み

バーボン誕生の歴史を物語る前に、バーボンの古里、ケンタッキーという土地の歴史を考える必要がある (図1)。ケンタッキーが州として合衆国に加盟を許されたのは1792年であり、1800年までには43郡に分割され、ほぼ現在の分布となった。そのケンタッキーに移民が初めて定住したのは1774年6月で、フォート・ハロード (ハロードの砦: Fort Harrod, 現在の Harrodsburg, Mercer County) といわれており、当時はバージニア植民地のケンタッキー地区 (District of Kentucky, Virginia) と呼ばれていた。独立戦争が勃発するわずか2年前のことであった。その当時は、バーボン郡は存在せず、フォート・ハロードはリンカーン郡 (Lincoln County) にあった。しかし、1780年にケンタッキー地区の分割が始まり、3つの新しい郡の1つにラファエット (LaFayette) 郡と命名し、それをさらに分割して1785年までにバーボン (Bourbon) 郡を含めて合計5つの郡が誕生した。ラファエットは有名なフランス将軍の姓であり、バーボンはフランス王朝バーボン (ブルボン) 家の名を冠したが、その他にもルイビル (Louisville)、ベルサイユ (Versailles) など、フランスに因んだ地区、郡などのフランス語名が続々と誕生したのは、独立戦争を支援したフランスへの感謝の気持ちからであった。さらに、合衆国の独立運動に啓発されたフランス国民が、2、3年後の1789～99年には王朝支配からフランス革命を実現することになる。しかし、民主政治の導入には失敗し、ナポレオンの時代へと引き継がれて行った。